

## 四季のコンサート だより

2018年4月1日発行  
静岡音楽友の会  
事務局 静岡市伝馬町19-3  
TEL・FAX 054(253)7789  
[http:// sconcert.jp](http://sconcert.jp)人間だけにできること

奥田恵二 (音楽評論家)

近頃、新聞紙面やテレビを賑わしている話題に、情報技術（いわゆる IT）や人工知能（いわゆる AI）やロボットに関わるものが目立って多くなってきた。

従来なら人間が頭脳や身体を用いて行なっていた作業を、機械類にまかせることにより、手間を省き、同時に効率化を図るといふ、産業革命以来、人類が夢みてきた動きに、あらたに前向きの弾みがついたということであろう。これにより、人間社会のありかたに大きな変化が生じ、一般人の生活様式にも予想外の新しい局面が展開することになった。われわれの身边にも、たとえば、インターネットを主体にした通信形式の飛躍的發展など、最新鋭の科学技術がひと昔前の方法を根底から覆してしまった例も少なくない。こういった技術革新が、手数ばかりを必要とした従来の効率の低い方法——便箋に文章をしたため、封筒に収め、切手を貼り、郵便局に持って行く作業——から人々を解放してくれたことはたしかに有り難い。これにより、おのずから余暇が生まれ、われわれの日常生活も潤ってこよいというものだ。

しかし、話は無論ここでは終わらない。ここでいささか想像を逞しくして、このような成り行きが——無論、実際にはあり得ないけれど——極限に達した社会を考えてみるのも一興かもしれない。人間社会の隅々にまで浸透した科学技術は、確実に人間を利するが、その一方では、人間固有の主体性を奪いかねない。すべてが「便利さ」、「能率のよさ」を基準に評価されるようになった社会——チャップリンがとうの昔に名作映画『モダンタイムズ』で見事に描き出したような社会——では、機械文明と人間生活との間に、かつてなかった大きな落差が生じ、太古からたかだか2メートルにも満たない身長と、それなりの頭脳を枠組みにして生存し続けてきた人類の「尺度」とはかけはなれた生活のリズムが、外部から強いられることになり、機械が下す即断が人間による判断よりも優先されるようになる。AIには人間の何億倍もの演算能力が備わっているというニュースは、かつて人々を驚かせたが、今では「一を聞いて十を知る」人工知能、つまりあらかじめ与えられた命令を着実に実行するだけではなく、問題処理方法そのものを自らの内部に開発する性能を備えたコンピュータが出現したという話に、われわれは唾然とするばかりだ。

この動きをさらに進め、人間の五感に類した機能と、より一層「人間らしい」姿態を備えたAI——いわゆるアンドロイド——を作る試みが、すでになりに成功している有様も、デパートの案内係を務めるロボットの姿などを通じテレビで紹介され、興味をそそっている。この動きがなおも一層加速し、人間とまったく区別のつかない人造人間が完成してしまうげにも恐ろしい時代が到来し、自己増殖の技術を獲得したAIが人類を絶滅に追いやってしまうのではないかと思ったりしてしまう。

しかし、このような埒のない空想にもかかわらず、やはりAIには立ち入れない、あるいは立ち入って欲しくない、人間本来の活動領域が存在し続けることも当然だ。それは「善さ」を尊び、「美しさ」を愛でる心である。AIの聖職者や